# 聖光の聖道浄土二門の教判説と当時の仏教

### 郡 嶋 昭 示

#### はじめに

聖光房弁長(一六二一二三八、以下聖光)は、法然面授の聖光房弁長(一六二一二三八、以下聖光)は、法然面授の重光房弁長(一六二一二三八、以下聖光)は、法然の説をそのまま説くものも少なくないが、聖光独自の思想が各所に説かれていることが知られており、従来の研究ではこれがに説かれていることが知られており、従来の研究ではこれがに顕彰的」作業と称され、、法然の説を研究する立場、と指摘され、また、他の人師からの批判への対応であったという側され、また、他の人師からの批判への対応であったという側され、また、他の人師からの批判への対応であったという側され、また、他の人師からの批判への対応であったという側であると指摘されている。

指摘を加えたいと思う。 も、賛同するものであるが、本稿では、聖光が念仏の教説をい、賛同するものであるが、本稿では、聖光が念仏の教説をい、賛同するものであるが、本稿では、聖光が念仏の教説をしてようとした対象者に着目し、上述の思想が、聖光が念仏の教説をしていまうな指摘は聖光の著作を見る限りは自然なことであ

> 定できるのである。 聖光が活動した九州北部の仏教の状況を見ると、太宰府安楽寺、観世音寺、高良社、油山といった組織があり、多くの楽寺、観世音寺、高良社、油山といった組織があり、多くの本情を有し、また、高良社に『大般若経』が施入され転読会は『法華経』や真言、密教を重んじる者が「有人」として登場することなどから、天台の思想を思わせる者達が活動していたことが考えられるのである。こうした視点から聖光の活動を見直すと、聖光自身での探究もさることながら、念仏の教えを伝える対象がこのような人師であったということが想表を伝える対象がこのような人師であったということが想象えを伝える対象がこのような人師であったということが想象えを伝える対象がこのような人師であったということが想象えを伝える対象がこのような人師であったということが想象えを伝える対象がこのような人師であったということが想象えを伝える対象がこのような人師であったということが想象えを伝える対象がこのような人師であったということが想象えを伝える対象がこのような人師であったということが想象えてきるのである。

討を試みたいと思う。である。本稿では聖光の聖道浄土二門の教判説に着目して検見ることが可能なのかどうか、検討を行うことが本稿の目的独自の主張をとりあげ、これらの主張がこのような視点からそこで、聖光の諸思想の中、法然の遺文に見られない聖光

— 92 —

#### 二 先学の研究

の背景を、 者鎮西上人――」で論じられている。梶村氏は、聖光の主張者鎮西上(3)――」で論じられている。梶村氏は、聖光の主張を選光の教判説に関する研究は梶村昇氏「弁長――念仏の行

- ・浄土門の一般仏教の中での位置を示すこと
- かれたもの・その目的は他者からの教学的非難に対応する責任から説

はいかという視点から見直してみたいと思うのである。り念仏の教えを伝える対象者を意識して成立したものなのでうな主張をする必然性が非難への対応とは別のところ、つま指摘であり、賛同するものである。しかし本稿では、このよと指摘している。この指摘は聖光の主張を見る上では自然なと指摘している。この指摘は聖光の主張を見る上では自然な

# 三 五時を用いた説明――『名目問答』冒頭の説――

聖光独自の主張が展開されている。ており、『念仏名義集』以外は法然の説のままにではなく、表集』『名目問答』『西宗要』『徹選択集』など、各所で論じ聖光は法然が主張した聖道浄土の教判について、『念仏名聖光は法然が主張した聖道浄土の教判について、『念仏名

では冒頭で教判について説かれており、まず釈迦一代の法とされているものが『名目問答』の説明である。『名目問答』聖光がこの聖道浄土二門を説明する中で、最も丁寧に説明

聖光の聖道浄土二門の教判説と当時の仏教

(郡

用いた説が展開されている。はどういうものかという説から始まり、続けて五時の思想を

問 諸余ノ一切ノ経ッ名ヶ為川聖道門ノ経「也。 六"、涅槃経、同醍醐味 (一日一夜所説満教大乗経)、是"云,,五時 阿弥陀経、 第三時)方等部)中で、 聖教一心。問、此一 所説満教大乗経)、五二、法華経、醍醐味(八箇年所説満教大乗経)、 大乗経)、二二、阿含経、 生蘇味(説時不定満教大乗経)、四二般若経、 一代聖教「者何」教、耶。 五時)所説也。五時一者、一二、華厳経、 以二何/経』為二浄土門之/経下耶。 以二此三部経7名為二净土門7経1。除15此7三部経7之外, 一代五時所説之中一、 有二多経一中二、 酪味 (十二年所説半教小乗経)、 双卷無量寿経、観無量寿経 以三何 乳味 ·教』為二聖道門/ 一代五時之中 (三七日所説満教 熟蘇味(三十年

に主張している。のものを聖道門の経とするといっている。さらに、次のようのものを聖道門の経とするといっている。さらに、次のよう『無量寿経』『観経』『阿弥陀経』がこれにあたり、それ以外が見られるのである。そして浄土門の経典は方等経の中のか見ら、天台で用いられるいわゆる五時の教判を用いた説明つまり、天台で用いられるいわゆる五時の教判を用いた説明

果スルッ、名,|聖道門「也。答、於;|此ノ娑婆世界「、修」,学メ仏教ッ、問、何ン名」,聖道門「耶。

断心煩悩っ、

(浄全一○・三九六上―下、( )

内割注)

以」之。為「浄土門」也。 経教』、為下不」能「入聖得果之」、『機」、説「此」浄土門」法門』也答、仏説『プ、浄土門』者、於『此ノ娑婆世界」、修「学ゝ彼」聖道門答、仏説『プ、浄土門』者、於『此ノ娑婆世界」、

である、といっている。得果が叶わない機根のために説かれた浄土門の法門を言うのを開いて入聖得果することであり、浄土門とは娑婆での入聖聖道門とはこの娑婆世界で仏教を修学して煩悩を断じ、悟り

性が確認できるという主張が見られる。

世が確認できるという主張が見られる。

性が確認できるという主張が見られる。

世が確認できるという主張が見られる。

世が確認できるという主張が見られる。

世が確認できるという主張が見られる。

世が確認できるという主張が見られる。

答、一些聖道門、二些净土門之。

依ヶ何二立渓〜ホーヤ此ノ二門『乎。

時往,「生ゞ極楽浄土「「。故'「云「浄土門」「。其」証諸経中'「皆有「」此」「云「「聖道門」「。浄土門者ト「ヘ、娑婆穢土''在「、浄土」行「「修ゞ、命終之也。聖道門「者、三乗」機、歴「内外」凡位「、断」「煩悩「入「「聖位「「故「咎、聖教」中「、正」云「「聖道門浄土門「'名目は無トヒ、義」'モテ分サ給「

義。

(浄全一〇・二二三上―下)

経のなかに見えると主張している。た後に極楽浄土に往生するという教えの二面ははっきりと諸煩悩を断じて入聖位に入る教えと、浄土の行を修して命終えいのではないかという問いに対し、その説は見られないが、といい、「聖道門浄土門」という説は諸経典の中には見えなといい、「聖道門浄土門」という説は諸経典の中には見えな

て取れる。
て取れる。
て取れる。
で以の違いをはっきりと示していることも見れる。そして、浄土門とは娑婆入聖得果が叶わない者の為のれる。そして、浄土門とは娑婆入聖得果が叶わない者の為のえを伝える対象が天台の教えを知る者であったことが考えらて説明している点で特徴的といえる。この例からも聖光が教の教判を説いたことに対し、聖光は特に天台の説を取り上げの教判を説いたことに対し、聖光は特に天台の説を取り上げ

このような説は、法然が諸宗の教判を取り上げて聖道浄

土

## 四 聖道浄土門の分析と浄土門の正統性の主張

いがあることを主張して、次のように言っている。六十一、聖道浄土二門事」では、聖道門にも小乗と大乗の違択集』でさらに体系的に説かれている。『西宗要』の「第正のように立場の違いを示す主張は、『西宗要』や『徹選

経、是→浄土門也。 (浄全一○・二二四上)浄土、因『、命終之時往』,生スッス、浄土『是→浄土門也。故『三部阿弥陀小乗』聖道⅓。大乗,入聖得果√、大乗)聖道也。依』浄土経『、修二大小乗〉聖道其証非以一。 一代/聖教『皆見ヘップ 小乗/入聖得果√、大乗,聖道⁴者、諸大乗経『菩薩/法別修メ無生忍別得\*\*云ベ是→也。大乗,聖道⁴者、諸大乗経『菩薩/法別修メ無生忍別得\*\*云ベ是→也。

門だという立場の違いを主張しているのが明らかに見て取れ門だという立場の違いを主張しているのが明らかに見て取れによって往生浄土の因を修し、命終時に往生を得るのが浄土大乗小乗に説かれる聖道の教えは多岐にわたるが、浄土の経

も見られる。それは次のようなものである。 このように聖道門を細分化して論じる例は『徹選択集』に

りと示されている。の違いがあるとし、依り所とする浄土門の位置がよりはっきここでは浄土門についても「十方浄土門」と「西方浄土門」

いることが、聖光の思想の深まりともいえるかもしれない。る『徹選択集』では『西宗要』の説よりも詳細な分析に及んでことがわかる。特に聖光の生涯のうち最後に記されたとされことがわかる。特に聖光の生涯のうち最後に記されたとされこのように天台の五時の教判を用いた説明の他に、聖道門、

ではないだろうか。同様の主張は『西宗要』にもみられる。の浄土を説く部分をならべ、西方極楽浄土門が諸宗で用いらの浄土を説く部分をならべ、西方極楽浄土門が諸宗で用いら毘婆沙論』易行品、『大智度論』、天台『十疑論』に阿弥陀仏毘婆沙論』のこの説には、続けて『大乗起信論』、『十住『微選択集』のこの説には、続けて『大乗起信論』、『十住

也。一今、果報、始終『宗よ》釈ぶれ。今、且で断惑証理『不以堪者』、他方」正よ。釈ぶ事』、浄土宗、人師『、釈ぶ給『ぶ。天台宗等』、華報よ釈ぶ云、浄土門「事、聖道』為以宗よ、聖道」始終『釈ぶ給へふ。浄土門」機『答、円教』一門"摂ぶ。既"是し大乗菩薩,教すよれ故、但》是『別以不い答、円教』一門"摂ぶ。既"是し大乗菩薩,教すよれ故、但》是『別以不い

### 聖光の聖道浄土二門の教判説と当時の仏教 (郡 嶋

又難ゞ云、抑出離生死」、為『ハ何じう教』、易\*二門づ中にハ、以」何じゅ浄土『生ゞ、彼づ土』ゞ断惑証理ス゚セ也。仍゚別ゞ不」立」之ッ。

為」易上、以」何上ョ為スルヤ難上乎。

答、浄土門、易教易行也。聖道門、難教難行也。

(浄全一〇・二二四上―下)

ると主張している。円教にこの教説がありながら浄土門の教ると主張している。円教にこの教説がありながら浄土門のないのは、聖道を宗とする者はとりたててこれが浄土門だということはないが、浄土門に依る者が特にこれを当土門といっているこのだというのである。さらに言うならば、天台宗などではこれを「華報」といい、あえてこれをらば、天台に対してはこれを「華報」といい、天台(智顗)等の人師は浄土門の教説を円教に収めといい、天台(智顗)等の人師は浄土門の教説を円教に収める。

ることができる。 作業を行っている。これも天台宗の人師を意識した主張とみ門の教説を円教に収めることを主張し、念仏の位置を高めるに関する説示が見られること、天台(智顗)等の人師は浄土このように聖光は諸宗で用いられる文献に阿弥陀仏の浄土

計\*'夫ン、時「属」゙減後「代「当」゙末法「。戒定智慧漸「廃・、得ハー道しめくくっている。

果『甚》希\*\*」。如来〉滅後已"二千余年、去言"\*大聖『甚》遥遠也。理果『甚》希\*」。如来〉滅後已"二千余年、去言"\*大聖『甚》遥遠也。理果『甚》希\*」。如来〉滅後已"二千余年、去言"\*大聖『甚》遥遠也。理果『甚》希\*」。如来〉滅後已"二千余年、去言"\*大聖『甚》遥遠也。理果『甚》希\*」。如来〉滅後已"二千余年、去言"\*大聖『甚》遥遠也。理果『甚》希\*」。如来〉滅後已"二千余年、去言"\*大聖『甚》遥遠也。理果『甚》希\*」。如来〉滅後已"二千余年、去言"\*大聖『甚》遥遠也。理果『甚》希\*」。如来〉滅後已"二千余年、去言"\*大聖『甚》遥遠也。理果『表』看』

(浄全七・八五下)

るのである。この主張はまさに聖道門に身を置いた者に対するのである。この主張はまさに聖道門に身を置いた者に対すの身で断惑を得ることも叶わないにもかかわらずどうしてこおらず、我らは鈍根無智の身であり、聖道の機根に漏れ、こお、戒定恵も廃れ、道果を得た者は億億の衆生の中に一人もぎ、戒定恵も廃れ、道果を得た者は億億の衆生の中に一人もぎ、戒定恵も廃れ、道果を得た者は億億の衆生の中に一人もぎ、戒定恵も廃れ、道果を得た者は億億の衆生の中に一人もざ、戒定恵も強力を関いた者に対するのである。この主張はまさに聖道門に身を置いた者に対するのである。この主張はまさに聖道門に身を置いた者に対するのである。この主張はまさに聖道門に身を置いた者に対するのである。

#### 五 聖光の主張の必然性

る主張と見ることができる。

にまとめられる。 以上、聖光の教判説について見てみたが、およそ次のよう

(『名目問答』) 台の思想を用いた釈迦一代の法と浄土門の位置の説明

- 娑婆入聖得果を求めるものとそれが叶わない者の救いと いう立場 の違いの主張 (『名目問答』 『西宗要』 『徹選択集』)
- 浄土門の教説が聖道門の教説に対して価値が劣るもので はないという主張(『西宗要』『徹選択集』
- 聖道の者も自身を省みて浄土門に依るべきであるという (『徹選択集

『西宗要』や『徹選択集』にも同様の説が見られるのである。(5)すべきではないか、という天台を想起させる問いが見られ、 にいうならば、五時の教判を用いた説明が見られる『名目問 であったからであると考えることはできないだろうか。さら 時聖光のまわりにいた人師に念仏の教えを伝えるのに効果的 多く見られたが、この傾向から天台の思想を用いた説明が当 そしてこのような主張には、 答』には、『法華経』や『薬師経』を読誦することは助業と つまりこのような聖光の主張からは、このような者を対象 天台の思想が用いられることが

れるに至った必然性が説明できるのではないかと考えるので べきことを聖光は力説しているのである。 し、またその価値の高いことを主張し、浄土門を拠り所とす 者とし、天台の思想を踏まえがなら浄土門の教説の特色を示 このように対象者を想定することで聖光独自の思想が さらには聖道門と浄土門の立場の違いをはっきりと示

> 土教の思想と歴史』山喜房仏書林、 主三上人の研究』三上人遠忌事務所、 頁)、香月乗光「鎮西教学における祖述と顕彰」(同著 九八七)、坂田良弘『鎮西聖光上人の教学』(浄土教報 兼学の精神」(『源智弁長良忠三上人研 西存祐 「鎮西国師に就いて」(知恩院編 一九七四)、 一九三五、四 究 高橋弘次「聖 同朋社、 九一五一

二〇一四)にて指摘した。 廣川堯敏教授古稀記念論集刊行会編 『浄土教と佛教』法蔵館

第一○巻、

講談

— 97 —

郡嶋昭示「平安末鎌倉初期の九州北部の仏教思想について」

社、一九九二、一三五—一四二頁。 梶山雄一他『弁長・隆寛』浄土仏教の思想、

3

2

- 『徹選択集』(浄全七・八四上)。
- 5 前掲郡嶋二〇一四にて指摘した。

〈キーワード〉 日本中世、 聖光、浄土宗、

大正大学非常勤講師・博士 (仏教学))

聖

ある。